
『愛花-アィカ-』

零那

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『愛花ーアイカー』

【作者名】

零那

【あらすじ】

『茉莉花ーマリカー』
の、続編として。

茉莉花先輩が
逝ってしまった。

その後の、零と

愛花サンとサムライ・・・。

『愛花サンとサムライ』

愛花サンとサムライ。

2人は付き合ってるまま。

此の世を去った茉莉花先輩。

2人は罪悪感など無い様な・・・

悲しみすら無い様な・・・

其の姿に憎しみが増す。

2人は薬にハマってた。

見たくなかった。

呼び出される。

放っとけんから行く。

部屋からは出ん様になる2人。

薬の量も種類も増えていった。

色んなニオイが充満した部屋の窓を開ける。

其の瞬間に、虫が大量に入ってきたと騒ぐサムライ。

幻覚も前より酷い。

こんなんで外出たら捕まえて下さいって言ってるようなもんや。

誰が見てもイッとする。

2人を通報しよ思ったら出来た。
でも零は2人が憎かった。
殺意が在った。

其の殺意は、零の茉莉花先輩に対する想いの重さからくるものだった。

単純に好いてただけやない。

忠誠心みたいなものも抱いてた。

其れは産まれて初めての感情で、唯一無二の失いたくない存在だった。

此の人の為に・・・

此の人の為なら・・・

そう強く想えたんは、あの日救ってくれたんが茉莉花先輩やったから。

茉莉花先輩やったからこそ。

通報しても、せいぜい鑑別とかやん？

初犯やし未成年やし・・・

警察も面倒事嫌がるし、もしかしたら何処にも入らんかもしれん。せやったら零が此の手でやる。

いつか其の時は来るやろ・・・

もう、今更薬抜くのは無理。

素人でも手遅れなんが解る。

専用施設に入って繋がれてないと危険。

しかもスグ薬が切れる。

キリが無い。

暴力もハンパ無い。

家では養父に玩具にされて、此処来たら来ただ関係ないのに八つ当たりされて、ホンマ殺したい。

でも薬のせいって解ってるから理性は在った。

出来るなら関わりを断ちたかった。

其れでも、心の何処かで希望を希望の欠片を棄てたくないって思いが在った。

サムライには、零が茉莉花先輩に連れて来られて日が浅い頃、色々お世話になってた。

それに、愛花サンの事を茉莉花先輩は最期迄大事に想ってた。

出来るなら改心して、あの頃の2人に戻って欲しい。

無理って解ってるけど諦めが悪い零の悪い癖。

負けず嫌いの零は、2人に負けて欲しく無かった……。

2人の家に出来る限り行った。

茉莉花先輩の話ばかりした。

共通の楽しかった思い出……。

2人にもシツカリ思い出して欲しかった。

永遠に忘れて欲しく無かった。

零は必死だった。

でも、2人には何を話しても届かんかった。

目は虚ろで、異様なテンションになったかと思えば沈み墮ちたり．．．。
泣いたり叫んだり笑ったり．．．。

2人共が壊れた。

共倒れ．．．。

『本心』

後日また行った時、サムライが薬買いに行ってて居らんかった。愛花サンは壊れてなかった。

普通にボーツとしてるだけに見えた。

薬してた時とは明らかに違って見えた。

でも、零に気付いた途端、壊れてるフリを始めた。

数日の期間が空いてたから、何かあったんかもしれん。

愛花サンに聞いた。

『何があった？何が変わった？愛花サンは薬抜けてんの？』

『．．．．．』

『もしかしてサムライの方が愛花サンに．．．？』

『ちゃうっ！サムライは悪う無いっ！あたしが、あん時ヤメれんかったけん！！やけんサムライが興味本位で打ってしもたんよ．．．』

『ほなサムライが見事にハマッたんやな．．．』

『サムライがハマッタゆうか逆にあたしが冷静なっしてしもて．．．』

『何やってんの！なんでそんな時すぐヤメさんのん！！』

『殴られたんよ。あたし喧嘩以外で誰かに一方的に殴られたとか無いけん、逆らうんが怖かったんよ・・・アンタからみたら、あたしはアホなんやろね。もっともって痛くて酷い事毎日されよんやけん・・・』

『ホンマやな。殴られてもスグにヤメさすべきやったわ。ホンマに大事なん？サムライの事』

『大事やけど怖い。心底好きか言われたら自信ない』

『ほな通報したらええやん。縛られてるワケちゃうし』

『そんなん出来ん』

『なんで？』

『大事やけんやんか！！』

『ほな意地でもヤメさせえや！！殴られてナンボだろ！！ホンマに大事ちゃうから自分犠牲に出来ひんねやろが！！』

愛花サンが泣いてしもた。

イジメてるワケちゃうのに・・・。

悔しいとかなら行動せえや。

『泣く暇あんねやったら何をせなあかんのんか考えたら？悪いけど
愛花サン幻滅やわ。茉莉花先輩に対する裏切りは許せん』

『あたしも辛かった！！泣きたかった！！罪悪感でいっぱいなんよ．．．
あたしが死にたかった．．．あゝ————————っ！！』

なんか知らんけどワザとらしく思えて異様にムカついた。

『．．．ふん。そんな風に見えた事1回も無いけど』

『ホンマやしっ！信じてや！』

『ほなサムライと手え切れや。茉莉花先輩がどんな想いでアンタの
事許して、どんな想いで死ぬことを選んだか解るやんなあっ！！
零は辛くて辛くて耐えれんのよ！！茉莉花先輩が居ったから生きて
これたんや！！茉莉花先輩が戻ってきてくれるなら命やかくれてや
る！！何でもやる！！何でも出来る！！』

逢いたいんよ！！

茉莉花先輩に！！

逢いたい．．．逢わせてや．．．』

くそーっ．．．泣いてしもた。

怒りと悔しさと情けなさと悲しさ．．．

『ホンマごめん．．．ごめん．．．零．．．ごめんなホンマに．．．』

愛花サンも泣き崩れた。

♪

暫くして愛花サンの携帯が鳴った。

『もしもし………
今すぐ行きます!!』

沈黙が長かった。

愛花サンは固まってる。

いや、今すぐ行きます言うてたし……緊急事態やんな?普通。

『……何?誰?』

『サムライが……警察で……事故して……』

パニックってた。

でもそれだけ聞いたら誰でも解る。

とりあえず警察行かなあかんねやんな……。

『愛花サン!!とにかく冷静に運転して!!零は後ろ乗るけん警察
向かって!!落ち着いて!!』

愛花サンの後ろ乗ったこと無いし、冷静ちゃうし若干怖かった。

事件起こしたか、殺したか、死んだか……どれであってもおかしくない。

捕まっただけなら、愛花サンの様子がここまでになるワケがない。

それに、普通に捕まっただけなら警察の動きこんなに早くないやろ．．．。
解らんけど、妙に鼓動が早くなってく。

嫌な予感しかせん。

『サムライの逝き様』

警察に着いてまず話を聞いた。

遺体を確認しに行った。

カラダが変形してた。

血まみれだった。

顔はグシャグシャだった。

良く見な解らんけど、サムライ本人に間違いなかった。

でも・・・左手の薬指には何故か茉莉花先輩との婚約指輪が・・・

其れを見た愛花サンは、涙も流さず、さっき迄の動揺すら無くなっ
た。

ただただ其の左手を見つめたまま放心状態だった。

サムライが見つかったのは山。

通報者が居た。

事故以前に暴行を受けてる。

ポケットには薬。

面倒にしたくない警察は大した捜査もせず、薬物中毒者の幻覚によ
る事故で片付けた。

暴行した輩は売人やろな。

相手が解れば話は聞ける。

金銭的なトラブルは有ったかも。

サムライは金を出さん。

茉莉花先輩と一緒に頃から。

暴行を受けたこと以外は、逝き方が茉莉花先輩と同じ。

場所も同じ。

何の因果か・・・。

暴行と外傷で遺体は相当スゴイ事になってた。

『真相』

売人を捜した。

見つかって話を聞いた。

アッサリ口を割った。

女やしクソガキや思てナメ腐りやがって。

バカにした物言いがムカついた。

30前のオッサンのくせに見た目ハタチそこらのガキに見える。

この年で未だ売人って……。

バカだろ絶対。

……って、中学生の零が内心コイツらをバカにしてた。

事の発端はやっぱり金銭絡み。

相当借金しとったらしい。

サムライは此の売人の上の人にも借金しとった。

先に返さな売らんって言われて発狂したらしい。

手に負えんなって、黙らす為に仲間呼んで暴行に至ったと。

なるほど。

納得。

でも殺す必要有った？

殺しては無いって言う。

暴行はしたけど、歩いて単車迄行ったし、単車も普通に乘って行っ

たって。

眞実は現場見して貰わんと解らんやん？

暴行した処、連れて行って貰った。

血痕に、歯まで在った……。

そのまま……

其の痕跡をジッと見てた零に言い放った。

『いつ捕まってもええで。通報するならせんけん嬢ちゃん。かまんで』

苛っとするわホンマ。

我慢して頭下げて出た。

通報しても変わらん。

同じ様なクローンがウヨウヨしとんやけん、いたちごっこ。

サムライは、最期の最期に正気に戻った。

茉莉花先輩の元に逝きたくなかったんか……

そう想えば綺麗な思い出。

綺麗な生き様やったんやなって思ってしまう……

眞実は……

本人にしか解らん……

あの世という世界が在るなら、ソッチで2人で幸せになれたら．．．

そう願ってしまう．．．

『愛花の散り様』

急に、家に帰ってる愛花サンの事が心配になった。

鍵開けたら締まった。

鍵開いてた？

いつも絶対鍵だけは閉めろってウルサイ愛花サンが？

風呂場から、浴槽にお湯を溜める流水音がする。

愛花サンは根本的にシャワーだけの人やから嫌な予感しかない。

勘弁してや……

覚悟して風呂場に行く。

上下、下着姿。

足を伸ばしてお湯に浸かってた。

お湯は胸辺り。

お湯を止めて栓を抜いた。

愛花サンの右手には包丁。

スグ傍にはナイフが在った。

お湯は紅い。

脈はある。

でも意識が無い。

愛花サンの携帯を捜した。

救急車を呼ぶ。

テーブルの上には赤玉（エリミン）とハルシオン。
それと日本酒。

あと注射器。

睡眠薬とシャブと日本酒って・・・

あんな風に寝れるか？

異様なテンションなりそうな気がするんやけど・・・
効果も体質によって個人差あるんやろうけど・・・

不思議に思いながらも風呂場に戻る。

ビックリするくらい冷静だった。

お湯が抜けきった。

右足の太もも真っ赤。

タオルを軽く押しあてる。

浮かび上がったのは字。

『マリカ ゴメン』

左手は、肩から手首迄、縦に切ってた。

なんか・・・なんなんやろ・・・

零も此処で逝こうかな・・・

茉莉花先輩とまた逢えるかな・・・

あの世に逝けば、都合の悪い事は全部忘れて、皆でまた仲良く過ごせるかな？

救急車のサイレンで我に返る。

左手首から痺れが走る。

あー．．．やってもたんや．．．

逝けんの解っとんのに．．．

適当なタオル巻いて救急隊の質問に応える。

一緒に病院に向かう。

なんか慌ただし。

『脈ありますよね？』

助かりますよね？』

『．．．脈はあります』

『助からないんですか？』

『受け入れ先が．．．今は何とも．．．やれるだけの事はやってますから．．．』

あんな喧嘩するんや無かった。

零が追い詰めた。

零が殺してしまう。

もし死んだら零のせいや。

なんで優しくせなんだんやろ。

茉莉花先輩を強く想い過ぎて、愛花サンにキツくあたり過ぎた。
今更悔いても遅い。

助かって！

とにかく生きて！

謝らして欲しい……

愛花サンはやっと病院に搬送された。

零も、タオルに気付いた看護婦さんに手を引かれ、手当てされた。

状況を聞かれ、ありのまま話した。

原因を聞かれ、サムライの話に。

自分が追い詰めた事も。

更に聞かれ、茉莉花先輩の話も。

それが全て。

看護婦さんが警察を呼んだ。

警察は知ってるから面倒そうな態度。

自殺未遂。

事件でも何でもない。

すぐ帰っていった。

愛花サンが出て来た。

輸血はしたけど意識が戻らん。

意識が戻れば帰って良いって。

はあ？

んな軽いもんちゃうやろ！

苛立ってしゃあない。

世の中や大人の汚さ、醜さ、理不尽さ……解ってるつもり。
何とか怒りを抑えた。

病室に一緒に行った……

此処暫くの事、整理する。

零は自分の家の事もある。

毎日耐えれんほどの屈辱に耐えてる。

殺したい気持ちを抑え、養父の玩具として生かされてる。

正直、自分の事だけで限界越えてるし精一杯……

茉莉花先輩、サムライ、愛花サン……

皆が逝ってしまえば、どうしたらいいか解らんなる。

救いがなくなる。

でも、零には、感情を殺す、痛みを消す……そんな術があった。

零には、もう1人の零が居た。

大丈夫。

何が起きても平気。

零は乗り切れる。

冷酷で残酷、心やか一切無い零になる。

愛花サンの両親に電話する為、公衆に行く。

パニくる両親。

質問に応える零。

両親は信用せなんだ。

愛花サンは良い子で、そんな子じゃ無いと。

本当の愛花サンを何ヒトツ知らなんだ。

30分位話した。

テレカがもう無くなる。

とにかく来たら解るから来て欲しいってお願いして切った。

病室に帰ったら何かが変。

置いてたナイフが無い。

落とした？

誰か持って行った？

愛花サンも、さっきと変わらず。

両親が看護婦さんと一緒に来た。

優しいそうというよりは、か弱そうな母親。

ほんわかした雰囲気、目の細い父親。

此の両親なら、パッと見だけの判断やけど・・・子供は優しくしてニ

ニコしてて良い家庭になりそう・・・

人間、見た目じゃ解らんって事なんやろな、やっぱり。

看護婦さんが血圧測る為に少し布団をはぐった。

其処に伸びてたはずの手がない。

代わりに紅く染まったシャツが・・・

なんで・・・！

もしかして、電話の間に意識が？

あかん・・・零が殺した。
完全に零の責任。

泣き叫んだ。

壊れた。

感情が狂った。

気を失った。

気付いたらベッドの中。

点滴抜いて看護婦さん処に行った。

愛花サンは、両手でチカラ強くナイフを握ったまま・・・
心臓ひと突きだったらしい。

『罪悪感』

零が殺した。

2回も追い詰めた。

意識不明って言葉に、無意識に安心してた・・・？

零が殺した。

おなじみの警察。

事情聴取。

何を聞かれても同じ事を繰り返した。

『零が殺した。追い詰めた。捕まえてっ！！』

それしか・・・。

『おまえが殺したわけやない。捕まえるんは無理や』

零の家庭事情も知ってる。

島の警察に聞いてたらしい。

物凄く長い1日だった。

1日で2人逝った・・・。

こんな状態で帰らされても辛い。

・・・いや、なんともない。

いつも通り。
やり過ごすだけ。

何が起こっても、あの家に入る時、零は零の心を潰す。
特殊能力。欠陥人間。

罪悪感すら消えてしまう。

この家から出れば、抑えた分、反動からか一気に溢れ出し狂う。
自分の感情をコントロール出来ん。

一生、消えることのない罪悪感。
罪悪感・・・というより、罪。

『此の世の果て』

此の世の果てに、あの世が在るんよね？

此の世とサヨナラした人が、あの世に逝くんよね？

あの世が、どんな処か・・・

誰か教えて・・・

此の世の果てには何が在るのか・・・

誰か教えて・・・

此の世の果てと、あの世を繋ぐ処が在るなら・・・

誰か教えて・・・

哀し過ぎる・・・

此の世とサヨナラしたい・・・

あの世へ逝かせて・・・

此の世の果てに逝かせて．．．

生きていけません．．．

どうか．．．

どうか．．．

願わくば．．．

— E N D —

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~15607

『愛花-アィカ-』
2016年01月14日 21時58分発行